

奥の細道

松尾芭蕉

序章

月日は百代の過客^{ひゃくだい}であり、行き交う年もまた旅人である。舟の上に生涯を浮かべるもの、馬のくつわを取つて老いを迎えるものは、日々これ旅にあり、旅を住みかとしているのだ。古人も多く旅に死んだという^{三〇}。私もいつ頃よりである^四、ちぎれ雲のように風にさそわれては^五、漂泊の思いやまず^六、海辺をさすらつたものである^七。去年の秋、江上の破れ小屋に^八蜘蛛の古巢を払い、ようよう年も暮れる。春立つ霞の空^九に、白川の関を越えて^{一〇}みたいもの、とそぞろ神にとりつかれ心乱され、道祖神にも招かれては^{一一}取るものも手につかぬありさま。股引きの破れをつくろい、笠の緒すげかえ、三里^{一二}に灸をすえなどしているが、松島の月、いかがであろうかとまず心にかかる^{一三}。それゆえ住まいは人に譲り、杉風の別宅に^{一四}引越すにあたって、

草の戸も住替わる代ぞひなの家^{一五}

鑑賞(古びたこの草庵も、住む人が変われば、代替わりするもの。愛らしい雛など飾る若やいだ家にもなるのであろうか)

これを発句に、表八句^{一六}を庵の柱へと掛け置いた。

旅立ち

弥生^{やよい}も末の七日^{一七}。あけぼのの空^{らうろう}朧々として^{一八}、月は有明、光も収まろうと^{一九}する中に富士の峰がかすかに見える^{二〇}。上野、谷中の花のこずえ^{二一}、またいつ見られようかと心細く思われる。親しいもののみ、宵^{よい}より集い^{二二}、舟に乗り込み送ってくれた。千住^{せんじゆ}という所で^{二三}舟より上がれば、前途三千里の思い^{二四}万感となつて胸ふさがり、今は幻のようになちまたに^{二五}離別の涙をそそぐ。

ゆくはる^{ゆくはる} じりなきうお^{じりなきうお}
行春や鳥啼魚の目は泪^{二六}
なみだ

鑑賞(今、遥か遠くへと旅立って行く。別れを惜しみ、また行く春を惜しむかのように鳥も泣き、魚す

ら涙を流しているように思われてならぬ)

この句を旅の矢立^{やたて}二七はじめとしたものの、足取りはなかなか進むものではない。人々が途中に立ち並び、後姿の見える間は、と見送ってくれるからであろうか。

草加^{そうか}

今年^{ことし}は元禄二年^{げんろくにに}二八であつたか。奥羽^{おくう}さしての長途^{ながと}の行脚^{あんぎや}二九、ただかりそめに思い立つ。呉天^{ごてん}に白髪^{はくはつ}の恨みを重ねるといふが三〇、耳にすれどもいまだ見もせぬ地を踏み、もし生きて帰ればとはかない願いを胸に抱きつつ、その日ようよう草加という宿にたどり着いた。瘦骨^{そうこつ}の肩に食い込む荷にまず苦しめられる。ただ身ひとつにて、と出で立つつもりが、紙子^{かみこ}三一一枚は夜寒^{よせむ}の防ぎ。ゆかた、雨具、墨、筆のたぐい。あるいは断りきれぬはなむけなどのいただきものは、さすがに打ち捨て難く、旅路^{りょろ}の煩^{わづら}いとなつてしまった。仕方のないことである。

室むろの八島やしま

「室の八島に詣でる三三。同行の曾良そら三三が、
「この神さまは、木の花咲くや姫と申して、富士浅間神社と一体です。神話では、お姫さまが無戸室うつむろに入り火を放つて誓を立てる。その最中にお生まれになったのが火々出見の尊みこと。これにちなんで室の八島と申します。三四また八島に煙を付け合せて歌を詠むこともこのいわれにより三五ます」
と語った。さらに、当社にはこのしろという魚を禁じる三六縁起も伝わっている。

仏五左衛門

三十日、日光山のふもとに泊まる三七。この主が、
「わが名、仏五左衛門と申します。なにことも正直を旨といたしますゆえ、人もこのように申しますもので。一夜の草枕三八、打ち解けてお休みなさいませよう」
という。いかなる仏が、この濁世塵土に現れ出でて三九、このような桑門そうもんの四〇乞食巡礼こつじくじゆれいごときものをお助けくださるのかと、主のなすことに心をつけて見ていると、ただ無知無分別にして馬鹿正直なるものであった。剛毅木訥ごうきぼくどつは仁に近し四一、というが、生まれついでの清らかなころ、もつとも尊ぶべき

であろう。

日光

卯月うづき一日、お山に参詣した。その昔、このお山を二荒山ふたらさん^{四二}と書いていたが、空海大師開基の時、日光と改められた四三。千年の未来を悟られたものか、今この御光みひかりは一天に輝き、恩沢八荒おんたくはつこうにあふれ四四、四民しみん安堵あんじにして住みか穏やかである四五。これよりは多言たごん憚りはばかあつて、筆を置くとしよう。

あらたうと青葉若葉の日の光

鑑賞(青葉、若葉にこぼれる日の光。み仏の恵みが聖山にあまねくあふれ行き渡り、自ずと手を合わせられるありがたさ、尊さである)

くろかみやま
黒髪山には霞がかかり^{四六}、雪がいまだ白く見える。

そりす
剃捨てて黒髪山に衣更え^{ころもが} 曾良

鑑賞(髪を剃り出家の体で旅立ったものだが、この黒髪山にて奇しくも四月の衣替えとなった。装いも新たに長旅への誓いもいつそう強められるようだ)

曾良は、氏は河合、名を惣五郎という。芭蕉の葉の下^{四七}に軒を並べ、私の薪^{たぎ}をとり、水を汲む労を助け^{四八}てくれる。このたび松島・象潟^{きさかた}の眺めをともにすることを悦び、かつ羈旅^{きりよ}の難^{なん}をいたわろうと^{四九}するもの。旅立ちの暁に髪を剃り、墨染め衣に姿を変え、惣五改め宗悟とする。これにより、黒髪山の句がなつた。「衣更」のふた文字、力がこもつて聞こえる。

二十余丁山を登つて滝あり。岩洞^{がんどう}のいただきより飛流する^{五〇}こと百尺。千岩の碧潭^{へきたん}にどうと落ちる^{五一}。岩窟に身をひそめて^{五二}入り、滝の裏よりみるゆえ、これを「うらみ」の滝と申し伝えるところか。

暫時しばらくは滝に籠るや夏の初はじめ 五三

鑑賞げんご(初夏、清冽な滝の裏ふところに観じ入れば、その轟音と涼気でもって世俗妄念せぞくもうねんを吹き払い、しばし夏安居げあんごの修行僧となったようだ)

一 百代の過客 百代は、天地開闢より未来永劫の意。過客は旅人。古文後集、『春夜桃李園に宴する』の序、「それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」。↓菅菰抄

二 舟の上に生涯を浮かべるもの、馬のくつわを取って老いを迎えるもの 船頭・馬子をさす。

三 古人も多く旅に死んだという 芭蕉が慕う往古の歌人・詩人、すなわち西行・宗祇、李白・杜甫等はみな旅先に没する。ここまでが序文の発端はたんの詞。↓菅菰抄

四 私もいつ頃よりであらう ここから本序。↓菅菰抄

五 ちぎれ雲のように風にさそわれては 詩経「一片の孤雲、吹を逐おつて飛ぶ」。↓菅菰抄

六 漂泊の思いやまず 漂泊は、さまよい歩くこと↓菅菰抄

七 海辺をさすらったものである 前年、『笈の小文』の旅程にて鳴海・須磨・明石など海辺をめぐったこと。↓菅菰抄

抄

八 江上の破れ小屋に 隅田川のほとり、深川芭蕉庵。↓菅菰抄

九 春立つ霞の空 「立つ」は春と霞、両方にかかる。「霞」に「関」は付合いである(類船集)。↓菅菰抄

一〇 白川の関を越えて 白川は歌枕。能因「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」(後拾遺集) ↓菅菰抄

抄

二 そぞろ神にとりつかれ心乱され、道祖神にも招かれては そぞろ神は芭蕉の造語。「気もそぞろにさせる」神との意である。道祖神は路傍の守り神 ↓菅菰抄

二三 三里 膝頭下のくぼみ。ここに灸をすえると健脚になるという。

三三 松島の月、いかがであろうかとまず心にかかる 松島は奥州の名所。奥の細道の旅、前半の大きな目的地。 ↓菅菰抄

菅菰抄

一四 杉風の別宅に 杉風は芭蕉最古参の門下。氏は杉山、通称鯉屋市兵衛。日本橋小田原町在住。幕府出入りの魚商。別宅は深川六件堀の採茶庵。 ↓菅菰抄

一五 草の戸も住替わる代ぞひなの家 ↓菅菰抄

一六 表八句 百韻連句、初めの懐紙の表の記す八句。実際には、この八句は確認されていない。

一七 弥生も末の七日 三月二十七日のこと ↓菅菰抄

一八 あけぼのの空朧々として 長嘯子、山家集「ろうろうと霞みわたれる山の遠近(中略)あけぼのの空はいたく霞みて、有明の月少し残れるほど」(挙白集)。

一九 月是有明、光も収まろうと 源氏物語、帚木「月是有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えて」より。

↓菅菰抄

一〇 富士の峰がかすかに見える 祭神は、このはなさくやひめ木花開耶姫。浅間権現と称する。鳥居の額に、「三国第一山」とあるため「不二山」とも書く。↓菅菰抄

一一 上野、谷中の花のこずえ 上野の山を東叡、寺を寛永という。寛永年間、慈眼大師開基の霊場である。地勢が伊賀の上野の城に似ているため、この名があるという。谷中は上野の西。この二つの地域には、特に花木が多く、遊覧の地である。↓菅菰抄

一二 宵より集い つどいは、湊轅の字を用いる。より集まること。↓菅菰抄

一三 千住という所で 日光街道第一の宿駅。深川より船路約十キロ。↓菅菰抄

一四 前途三千里の思い 「李陵が胡に入りし三千里の道の思い」(東関紀行)。↓菅菰抄

一五 幻のようなちまたに 幻のようにはかない現世。「一切の有為法は、夢幻泡影の如く、露の如くまた電の如し。まさにかくの如きの観を作(な)すべし」(金剛経)。↓菅菰抄

一六 行春や鳥啼魚の目は泪 ゆきはる とりなきうお文選古詩、「王鮪河岬をおもい、晨風(鷹のこと)北林を思う」。古楽府、「枯魚河を過ぎて泣く、いずれの時か還りてまた入らん」↓菅菰抄

一七 矢立 綿に墨汁を含ませた墨壺に、筆入れの筒のついた携帯用筆記具。

一八 元禄二年 一六八九年。西行五百年忌に当たる年。

一九 奥羽さしての長途の行脚 おくう奥羽は、陸奥・出羽の略称。行脚は、旅行修行のこと。↓菅菰抄

三〇 吳天に白髪びやくぱの恨みを重ねるといふが「笠は重し吳天の雪」（禪林句集）、「五天到らん日に頭白かる応し」（三休詩）などの句よりとる。吳天は、吳の空。五天は、五天竺をさす。長旅の労苦をいつたものである。↓菅菰抄

三一 紙かみこ紙 洪紙で仕立てた防寒着。

三二 室の八島に詣でる 栃木市惣社町の大神（おおみむ）神社が、歌枕の室の八島と伝えられている。↓菅菰抄

三三 同行の曾良そら 芭蕉門下。本名、岩波庄右衛門正字。通称、河合惣五郎。信州上諏訪出身。元伊勢長島藩士。吉川惟足に神道を学ぶ。↓菅菰抄

三四 木の花咲くや姫と申して、（中略）の八島と申します。木こ花咲耶姫は、大山祇神の娘。天孫瓊々杵の尊の妃。天孫に、一夜にして懐妊したことを疑われ、身の潔白を証明するため、戸のない部屋に籠り、火を放ち出産したと伝える（日本書紀）。↓菅菰抄

三五 八島に煙を付け合せて歌を詠むこともこのいわれにより「いかでかは思ひありともしらすべきむろのやしまのけぶりならでは」藤原実方朝臣詩花集。↓菅菰抄

三六 さらに、当社にはこのしろという魚を禁じる 昔、ある村で国主より娘を奪われようとした人が、娘は死んだと偽つて、鱒魚を棺に入れて焼いた。鱒魚を焼くにおいては、人を焼くそれと似ているゆえである。この話にちなんでこの魚を、このしろ（子の代）と名付けたという。↓菅菰抄

三七 三十日、日光山のふもとに泊まる ↓菅菰抄

三八 草枕 旅寝のこと。

三九 濁世塵土じよんじんどに現れ出でて 塵にまみれ汚れた現世をいう。『老子』の和光同塵の語より。↓菅菰抄

四〇 このような桑門そうもんの 桑門そうもん、沙門しゃもんともに僧をさす。↓菅菰抄

四一 剛毅木訥ごうきぼくとつは仁に近し 『論語』子路第十三、「剛毅木訥は仁に近し」より。つくろわなない律義者は仁者に近い、

という意味。↓菅菰抄

四二 二荒山

ふたらかん
観音の浄土、補陀洛山に比した名。

四三 その昔、このお山を二荒山と書いていたが、空海大師開基の時、日光と改められた

師)ではなく、勝道上人。空海が勝道の求めにより「沙門勝道上補陀洛山碑」を撰したことによる誤伝。↓菅菰抄

四四 恩沢八荒にあふれ

おんたくはっこう
恩沢は慈恩、八荒は四方四隅の遠く、俗に八方をいう。↓菅菰抄

四五 四民安堵にして住みか穏やかである

しみんあんど
四民は士農工商。すべての民が安心して生活すること。↓菅菰抄

四六 黒髪山には霞がかかり

くろかみやま
日光山の主峰、男体山のこと。歌枕。↓菅菰抄

四七 芭蕉の葉の下

ふしぐさのくさ
深川芭蕉庵のこと。

四八 薪をとり、水を汲む労を助け

たきぎ
薪をとり、水を汲む労を助け。↓菅菰抄

四九 かつ羈旅の難をいたわろうと

かりよ
羈旅は、故郷を離れ他国にて旅をして過すこと。↓菅菰抄

五〇 岩洞のいただきより飛流する

がんどう
岩の頂上から流れ落ちる。↓菅菰抄

五一 碧潭にどうと落ちる

へきたん
碧潭は、緑の淵。滝つぼのこと。↓菅菰抄

五二 岩窟に身をひそめて

いばく
しほぐ
岩窟に身をひそめて。↓菅菰抄

五三 暫時は滝に籠るや夏の初

しばしば
はじめ
夏は、もと結夏といい、略して夏とした。僧が家にこもって修行する時の名。↓菅菰抄

菰抄

會良旅日記

會良

三月

巳三月二十日、芭蕉とともに発つ。深川で舟に乗る。巳の下刻、千住にて下舟。

一 二十七日夜、粕壁^二に泊まる。江戸より九里余り。

一 二十八日、間々田^三に泊まる。春日部より九里。前夜より雨が降る。

辰の上刻、雨が上がつたので宿を出た。しかしまた降りだした。午の下刻にやむ。この日、栗橋の関所^四を通る。手形を願ひ出たが、不要であつた。

一 二十九日、辰の上刻、間々田を出る。

一 小山^五まで一里半。小山の屋敷は右手にあつた。

一 小山より飯塚まで一里半。木沢^六というところより左へ曲がる。

一 この間、姿川^七を越える。飯塚より壬生^八まで一里半。飯塚の宿外れより左へ折れ、小倉川^九の河原を進み、川を越え、惣社河岸^{一〇}という船着場の上手にかかり、室の八島へ行く(乾の方角へ五町ばかりである)。すぐに壬生へ着く(毛武^一という村がある)。この間、三里とするが、実際は二里あまりである。

一 壬生から楡木^二までは二里。壬生より半道ほど行くと、金売り吉次^三の墓が、右手二十間ほどの畑の中にあつた。

一 楡木より鹿沼^四まで一里半。

一 昼過ぎより曇り。同夜、鹿沼(より文挾^三まで二里八丁)に泊まる。(文挾より板橋まで二十八丁、板橋より今市へ二里、今市より鉢石^一へ二里)

四月

一 四月一日、前夜より小雨降る。辰の上刻、宿を出る。やんでのち、時々小雨となる。終日曇り。午の刻、日光に着。雨上がる。清水寺^{一四}の書を養源院^{一五}へ届ける。大楽院^{一六}へ使いの僧をつけてくれた。折悪しく大楽院に別客あり。未の下刻まで待つて、お宮を拝見することができた。その夜は、日光上鉢石町^{一七}の五左衛門というものの方に泊まる。一五二四^{一八}。

一 同二日、天気快晴。辰の中刻、宿を出る。裏見の滝（一里ほど西北に位置する）、含満が淵^{一八}をめぐり、ようやく昼となる。鉢石を發ち、那須、太田原^{一九}へ向かう。通常は今市へ戻つて大渡^{二〇}といふところから行くのだが、五左衛門が近道を教えてくれた。日光から二十丁ほど下り、左へ曲が

る。川を越え、瀬の尾、川室^{二一}という村へかかり、大渡という馬次^{二二}に着いた。三里にやや届かないほどの距離。

○今市より大渡まで二里あまり。

○大渡より船生^{二三}へ一里半というが実際は一里ほどか。鬼怒川に仮橋がかかっている。が、みな船で渡る。

○船生より玉生^{二四}へ二里。未の上刻より凄まじい雷雨となる。ようやく玉生に着く。

一 同夜、玉生泊。宿がよくなかったので、無理をいい名主の家を宿に借りた。

一 巳三月二十日 元禄二年の千支(己巳) つちのとみ。

奥の細道本文では、三月二十七日出發としている。

二 粕壁 現在の埼玉県春日部市。

三 間々田 現在の栃木県間々田市。

四 栗橋の関所 現在の埼玉県北葛飾郡栗橋町。当時、

代官が関所を置いた。男は手形不要。

五 小山 現在の栃木県小山市。

六 木沢 現在の小山市喜沢。

七 姿川 思川支流。

八 壬生 現在の下都賀郡壬生町。

九 小倉川 思川支流。

一〇 惣社河岸 現在の栃木市内。

二 榎木 現在、栃木県鹿沼市内。

二二 金売り吉次 義経を奥州に伴ったといわれる、奥州の商人。

二三 文扶

現在の栃木県今市内。

二四 清水寺 浅草の天台宗江北宝聚院清水寺。

二五 養源院 本房御留守居の一房。水戸家菩提と参詣のための宿坊。

二六 東照宮社務所。

一七 日光上鉢石町 日光門前町。

一八 一五二四 一貫五二四文。金一步との交換レートか。

一九 大田原 現在の栃木県大田原市。

二〇 大渡 現在の今市内。

二二 瀬の尾、川室 ともに現在の今市内。

二三 船生 鬼怒川の渡し場。現在の栃木県塩谷郡塩谷町。

二四 玉生 宿駅。現在の栃木県塩谷郡塩谷町。

奥細道菅菰抄

養笠庵梨一

序

目前に馳走あれども、その味を知らぬものは、これを食わず。景勝ありといえども、その趣を解さぬものは参らぬ。馳走はもてなしの主。景勝は文飾の師である。いずれを否といえようか。芭蕉翁の北旅の記は、かの家をもつて、文章の巨峰と成したものだ。ここに、友人蓑笠庵主人、これに詳しく校注し、研究をきわめたというべきであろう。予はこの道のものではないが、作者の労をねぎらわずにおられようか。以上をもつて序となす。

南越青嵐山樵 漫書

霞に興をもよおし、露に感慨を抱くことが、歌

詠みの常という。未知の山々、島々などへも行くに想像させてくれるのが、歌の効用とはいえずうが、その峡谷、かしこの岸辺にたたずんで、これを眺め感受することで、歌の興趣もひとしお深く味わえるもの。古文・古歌の文句を己の心に浮かべ、よくその境地に没入して、景色を見れば文の巧稚もわかるものである。

芭蕉翁、さる年陸奥に旅立ち、辺地の端より、越路の国境までめぐり歩かれた。翁の句に詠まれた所々の歌枕は、その文飾も、句全体の一部分としても、技巧を尽くした高度なものであるが、不勉強なものが深く鑑賞できるものではない。その名所の名ばかり知って、うっかり見過ごしてしまっているに違いない。そうしたところ、蓑笠庵の主、普段より古典にいそしんだ心得により、こうした事態を嘆き、彼等を憐れみ、かすかな灯火

のもと、古書解読の三つの書を広げる。那須野の草の節々の、消えるほど繊細な言の葉に、茂る草の露を置き添え、越の海の深みを探つては、迷う人のふみならうべき、道しるべをつくつてくれたのだ。

さて本書を「菅菰」と名付けた所以は、^{ゆえん}「七分には君を寝させて三分にわれ寝む」と詠んだ故事に着想し、自身の古典の教養が深からぬことにより、これを恥じ、命名したのである。

まことにこの心は、中国の古書にいう「天命をこうむつて、人の心を治める」古い教えに叶うものである。そもそも天地というものは人によつてあらわれ、人は天地によつて伝えられるものである。わが日本においても、これはいうまでもないこと。伝えるばかりで、よく知ることを怠るならば、何をもつて尊しということができようか。よつてこの書を称え、乾いた硯を鳴らして、その緒

にこのようにしたためるものである。

勅伝燈住位僧正応堂上人採毫於日曜峰銀紫閣

わが翁の口癖に、「東海道、ひと筋も見ぬものには、風雅の心わからぬぞよ」がある。われはごく若いころより、この道をたしなみ、東国、守黒庵主の門下に仕え、ひまある折々には翁のつづられた文の端々に至るまで、お訊ねしていたものだ。師とわれとはいかなるご縁であつたのか、日頃こまかに教え導いてくれたものだが、はかなくも師弟関係十年にも満たずして、師は黄泉の国へと旅立たれた。なお、問いもしたこと少くはない。嘆きの内に、悲しみさえ募り加わるにつけ、これではならぬと心を励まして、ふたたび文才あ

る人、心利く友人などに分からぬこと、数々たずねることとした。

そうする内に、奥の細道の注解をと、ひたすら心がけたかひがあつたものか、さいわいにも、ふとしたきつかけで、公用により地方めぐりする機会がたびたび訪れるようになる。四十路の声を聞くころには、翁が杖をひかれた国々処々、おおよそ巡り渡り、名所旧跡の隅々まで、目の当たりに眺望し、ことさらに翁の文章、発句等への感慨きわまつて、ますますこの註書のことか心を離れなくなつたのだ。

とかくする内に、われも老いては耳に従うべき年齢となる。世のわざもはや勤めがたく、官を辞しこの丸岡に隠棲して、はや十歳ととせあまりの星霜せいそうを経、この注解書も完成した。これを上下二巻に分ち、奥細道菅菰抄と名付けたのであつた。時に安永申の夜、長月の末。筆を香椿亭の閑窓にそそ

ぎ、老いの目鏡めがねかすか幽かにて、梨一みずから叙すところである。

奥細道菅菰抄 上

越前丸岡 蓑笠庵梨一 撰

舟の上に生涯を浮かべる

生涯は、俗に、一生というようなものに、『莊子』に、「わが生や涯おわり有りなり」とある。

古人も多く旅に死んだという

ここまでが序文の発端はたんの詞ことばにあたる。

月日は百代の過客であり、行き交う年もまた旅人である

私もいつ頃よりであろう

『古文真宝後集』、春夜桃李園しゅんやとうりえんに宴する、の序に、

ここから本序となる。

「それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」と、
天地の運旋、日月の軌跡を旅にたとえている。逆旅は、旅籠屋、光陰は太陽の移り行くこと。過客は旅人という意味である。

ちぎれ雲のように風にさそわれては

『詩經』の、「一片の孤雲、吹を逐おつて飛ぶ」という風情である。

漂泊の思いやまず

漂泊の二文字はすべてただよう、と訓じる。さまよい歩くこと。

海辺をさすらったものである

吟行(さすらう)と書くべし。これも「さまよう」の意であり、文選の『漁父の辞』に見える。左遷という意味ではない。

江上の破れ小屋に

江上は、江都などというのと同じ。江戸をさす。(訳者注 漢文、日本の古文ともに江上は、水面または、川のほとりという意味である。深川芭蕉

庵のことであろう)

春立つ霞の空

『拾遺集』「春立つといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさは見ゆらん」、忠岑。

白川の関を越えて

古歌の立ち入れである。以下の「白河」の項目にくわしい。

そぞろ神にとりつかれ心乱され、道祖神にも招かれては

「坐」の字をそぞろと訓じてきた。が、ここでは「倉卒」の字を用いるべきだ。心のあわただし

い様で、神は比喩である。祖は門出の祭名といい、旅立ちの祭りである。黄帝の妹、累祖という人は、遠出を好み、ついに途上にて亡くなった。これにちなんで岐路きろの神として祀る。日本においては、猿田彦命さるだひこのみことを分かれ道の神とする。神代に天津彦火瓊瓊杵尊あまつひこほのにぎのひめこと、下界に降臨の時、迎え導いた神で、『日本書紀』にくわしい。後世、仏教徒が青面金剛せいめんこんごうを伝来し、これを庚申こうしんと称した。道路に庚申の像を置き、巷ちまたの神とするのはこれゆえである。

松島の月、いかがであらうかとまず心にかかる

松島は奥州の名所であり、以下にくわしい。『新勅撰』、「心あるあまのもしほ火烧すて月にぞあかす松が浦島」、祝部成茂。『新後撰』、「まつしまや雄島の磯による波の月の氷に千鳥鳴也」、俊成。

杉風の別宅に

杉風すぎかぜは、翁の門人、東都小田原に住む。本名、鯉屋藤左衛門といい、魚店を営む。

〇ここまでが序文である。

草の戸も任替わる代ぞひなの家

頃は二月末、上巳の節に近いため、雛ひなを売る商人が、翁の空いた庵を借り、売り物を入れて倉庫としたゆえ、この句があるという。もちろん雛の家箱には、あるものは二つの人形を一緒に入れ、またあるものは大小に箱を入れ替え、と毎年収蔵時に定めのないもので、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」の心にて人生の常な

いさまを観想した句といえよう。

旅立ち

弥生も末の七日

三月二十七日のこと。三月は草木が盛んに生長する時なので、「いやおい月」とする。いよいよ生じる、と意味である。略して「やよい」という。

月は有明、光も収まろうと

『源氏物語』ほうきぎ 笥木の巻の文章より。

富士の峰がかすかに見える

駿河の国、富士郡にあり。孝謙天皇五年六月、一夜にして出現したという。祭神は、木花開耶姫、このはなさくやひめ 浅間権現と称する。鳥居の額に、三国第一山、とあるゆえに「不二山」とも書く。むろん名所であり、世人の知るところ。

上野、谷中の花のこずえ

上野は東都の牛寅にあつて、山を東叡、寺を寛永とうえいでら かんえい という。寛永年間、慈眼大師開基の霊場であり、西都の比叡山を模すという。この地はもと、藤堂家の館地であり、地勢が伊賀の上野の城に似ているため、この名があるという。今、山口に車坂・屏風坂などがあるが、みな伊賀上野の坂の名をもらったという。谷中は上野の西。感応寺という天台宗の大伽藍があり、上野に隣接する。この二つの地域には、特に花木が多く、遊覧の地である。

宵より集い

つどいは、「湊轅」の字を用いる。より集まることである。

千住という所で

奥州往来の最初の宿駅。

前途三千里の思い

この五文字は、古詩文中の一句であることは間違いない。出典は調査中。あるいは、『古文前集』に、「此を去つて三千里」という意味か。前は「すすむ」と訓じる。途は「みち」で、前途は「行く先」ということである。

幻のようなちまたに

『詩経』にも、「夢幻泡影の如く、露の如く、また電の如く」と説き、俗に夢の世というように、人生のはかなさを喩える。

行春や鳥啼魚の目は泪

杜甫とほの春望しゆなぼうの詩に、「時を感じては花も涙をそそぎ、別れを恨みては鳥も心を驚かす」。『文選』の古詩に、「王鮪河岬をおもい、晨風（鷹のこと）北林を思う」。『古楽府』に、「枯魚河を過ぎて泣く、いずれの時か還りてまた入らん」。これらを趣向とした句であろう。

奥羽さしての長途の行脚

奥羽は、陸奥・出羽をいう。行脚は、『伝燈録』に「古靈行脚」とある。旅行修行のことである。

呉天に白髮の恨みを重ねるといふが

『禅則』に、「笠は重し呉天の雪、履は芳はし楚地の花」という句がある。白髪を雪にたとえることは和漢にその例が多い。○推測すれば、この呉は、あるいは五の誤りではないか。五天は五天竺をさす。『三体詩』に、「五天到らんに頭白かるべし」と。すなわちこの意である。

室の八島に詣でる

神社。下野の国、総社村にある。室の八島大明神と号す。祭神は、富士浅間の祖神であるという。すなわち木花開耶姫のことで、以下に見る。

同行の曾良

信州諏訪の生まれ。東武に遊学し、翁に随身する門人である。

木の花咲くや姫と申して(中略)室の八島と申します

『日本書紀』にいう。「当時この国に美人がい

た。名を鹿葦津姫かあしつひめ（またの名を神吾田津姫かみあたつひめ、または木花開耶姫）という。皇孫これを愛す。すなわち一夜にして子を授かった。皇孫がこれを疑ったので、鹿葦津姫は怒り、恨んだ。無戸室むつむろをつくり、これに入つて誓つていう。

『妾わらわが身みもつたのが天孫の子でなければ、必ず焼け死ぬこととなるでしょう。またもし、それがまことの天孫の胤たねであれば、火も妾を害することとはできないはず』

と。すなわち火を放ち無戸室を焼く。はじめに熾おこった煙のかげより生まれでた子を、火闌降命ほすせりのみことと名付ける。次に炎熱えんねつより避難した場所より生まれでた子を、火火出見尊ほほでみのことと名付けた。（下略）

無戸室は、俗に塗籠めというように、出入りの戸口のない家である。

八島に煙を付け合せて歌を詠むこともこのいわれにより

『詩花集』「いかでかは思ひありともしらすべきむろのやしまのけぶりならでは」、藤原実方朝臣。このほかに、煙を詠んだ歌は、千載・新古今・続古今集などに見える。一説には、「この野中に清水あり。その水蒸気が立ち昇つて煙のごとし」。これを室の八島の煙と呼んだという。

さらに、当社にはこのしろという魚を禁じる

コノシロは、鱒・鱒の字を用いてきた。俗に、終と書いているが、鱒の誤りであり、終は辞書にはない。これらの類はほとんど、小野篁おののたかむらの歌字尽くしという書物の過失から出ている。この書物は子供に与えてはならぬ。

○むかしあるところに住むものに可愛らしい娘があつた。国主これを知り、この娘を召し出そうとするが、娘は拒んで行かぬ。父母もこれがただひとりの子ゆえ、差し出すことを望まなかつた。とかくする内に、召し出しの使いが数度におよぶ。国主の怒りが激しいことを聞き、仕方なく、娘は死んだと偽って、鱒魚をどっさり棺に入れて焼いた。鱒魚を焼くにおいは、人を焼くそれと似ているゆえである。この話により、この魚を、このしると名付けたとか。

歌に、「あづま路のむろの八島にたつけぶりが子のしろにつなじやくらん」とある。この話は、『十訓抄』にあつたように覚える。このしろは、子の代しろであり、子供の代わりという意味。ちなみに、この魚を上方では、つなじと呼ぶ。

仏五左衛門

三十日、日光山のふもとに泊まる

日光山は、下野の国河内郡にある。祭神は、事代ことしろ主の命。開山は、勝道上人である。東都より北へ三十六里。

濁世塵土に現れ出でて

濁世じよくせは、『法華経』・『阿弥陀経』等という「五濁悪世」をさす。五濁とは、業濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁のこと。五塵は、眼・耳・鼻・口・心の塵汚じんおをいう。あるいは、色塵・声塵・香塵・味塵・触塵をいうとも。五濁五塵ともに、娑婆世界の嫌悪すべきものすべてをさしている。

このような桑門の

桑門そうもんは、沙門しゃもんの音便おんべんという。沙門しゃもんは、僧そうの梵語ぼんごである。

剛毅朴訥は仁に近し

『論語』に、「剛毅こうき朴訥ぼくたくは仁に近し」とある。剛毅は氣質のしつかりしたこと。木は樸と通じ、つくろい飾らぬさまをいう。訥は言葉の不調法なことをいい、いずれも律義者の形容である。

日光

その昔、このお山を二荒山と書いていたが、空海大師開基の時、日光と改められた

空海は、弘法大師のこと。『元亨釈書』に、

「釈の空海は、俗姓佐伯氏、讃州多度郡の人。父は田公たぎみ、母は阿刀氏あとうし。母は、梵僧が懐に入る夢を見た。そうして身ごもり、胎内にあること十二ヶ月、宝龜五年に生まれ出る。母はその夢のお告げにちなんで、幼名を貴物と名付けた。成人後、沙門勸操につき、法を受け、落髮。最初の名は教海。後に自ら改め、如空と称した。延暦十四年、東大寺の壇に昇り、具足戒を受け、さらに空海と改めた。二十三年、遣唐使に従って入唐。元和元年秋八月に帰る。大同太上皇、空海を壇に入れて灌頂かんじょう。帝者の密灌が、これより始まる。弘仁七年、紀州の相勝の地に遊説し、高野山に上り、金剛寺を創建。承和二年三月二十一日、空海はこの地で、結跏趺坐けつがふざし入定する。延喜二十五年冬十月、弘法大師の諡おくりなを賜った(大師・国師の号は、

みな帝王の師たる称号である。よってほとんど死後の諡として賜るのだ」とある。

空海を日光山の開基とし、さらに山名を改めたということは、日光山の記および、他の書にもいまだ見えない。

恩沢八荒にあふれ

恩沢は俗に、「おかげ」ということで、慈恩のうるおいをいう。八荒の文字は、『山海経』・『神異経』・『淮南子』等であり、荒は遠方をさす。八荒は四方四隅の（俗に八方という）遠い場所である。

四民安堵にして住みか穩やかである

四民は、「士農工商」をいう。『前漢書 食貨志』

に見える。安堵は、通常「案堵」と書き、歴史書中に散在している。安居と同じ。落ち着いて居ること。

黒髪山には霞がかかり

黒髪山は、上野国の名所で、上野・下野の境となる。

『続古今集』、「むば玉のくろかみ山を朝こえて木の下露にぬれにける哉」、人丸。

『方角抄』、「旅びとの真菅ますがの笠やくちぬらむ黒髪やまのさみだれの比こゝろ」。

薪をとり、水を汲む労を助け

『晋書』陶淵明の伝記にいう。「陶潜が彭沢の令となった。一人の力を息子に送ってという。この

ものを従え、自ら雑用をするな。この力を遺し、汝の薪水の労を助く」と。

力とは、下僕のこと。薪水とは、朝夕の炊事のことである。また、釈尊が、檀特山にて、阿羅羅仙人に師事した時、採果汲水の業をなしたことなどとの取り合わせであろう。

かつ羈旅の難をいたわろうと

羈は、本字は「羈」であり、よる、と訓じる。羈は仮音である。羈旅は、旅に居ることをいう。『左伝』に見える。

岩洞のいただきより飛流する

洞は、「峒」と通じる。岩峒は、岩屋のことである。

碧潭にどうと落ちる

碧は、みどりと和訓する。瑠璃色をいう。潭は、淵である。水の深いところは、瑠璃色に見えるため、このように名付ける。

岩窟に身をひそめて

岩窟も岩屋をさす。

暫時は滝に籠るや夏の初

夏は、もと結夏といひ、略して夏とした。僧が家にこもつて修行する時の名である。

『五雜組』にいう。「四月十五日、国中の僧と尼が禅利に行き塔に滞留する。これを結夏、また

は結制ゆせいという。また、安居あんごと名付けた」と。

『釈氏要覧』にいう。「心身が静謐なことを安、と申す。一定時期住むことを居、という」と。安居は、寂然じやくねんとして過ごごすことをいう。

○友人の僧、懶庵の説である。

「天竺の一年は、春夏冬の三季のみにて、秋がない。ゆえに一季は中国の四ヶ月に相当する。中国の当月十五日より、翌月十四日までを一月として、上旬の十五日間を黒月と呼ぶ。下旬の十五日を白月とする。中夏に、上弦下弦とするようなものがある。一夏九十日とは、夏一季の内、結制する日という。九十日が一季のすべてではない」。